

甲賀の中世城館

八木 厚之

1. はじめに

滋賀県教育委員会の中世城館跡の分布調査によると、滋賀県内には1,300か所余りの中世城館跡の分布が確認されている。滋賀県甲賀郡には、その内の約400か所が分布している。甲賀郡に多数の中世城館跡が存在する要因を甲賀市(旧甲賀郡)甲南町の望月城、甲賀郡同名中惣、六角氏の隆盛、織田信長と六角承禎と義治父子の戦いに焦点を当てて考えることとする。

2. 甲賀市甲南町の自然環境

甲賀市甲南町の平野部分は、野洲川支流のそまがわ杣川によって形成された小規模な沖積平野である。これは、沖積世の初めに琵琶湖周辺の段丘や台地を、河川が浸食して形成されたものである。海拔高度は琵琶湖周辺よりも約100m高く、土地の隆起による傾斜地が見られるだけでなく、丘陵地との交錯状態も見られる。

甲南町の地形の中で、最も広く分布しているのが丘陵地である。丘陵地の地層は、約250万年前の古琵琶湖層群にあたり土質は粘土砂礫層よりなっている。この地層は古琵琶湖の湖岸にできた堆積層が後に土地の隆起運動で陸地化し、それが雨水の浸食により丘陵地の形となったものである。丘陵地は海拔200~300m程度の地域が多い。

山地は甲南町の南西部に分布し、地質は粗粒花崗岩で形成され上層の古生層が浸食されて石英と長石が混合し良質の粘土に変化した陶土層の堆積が見られる。この陶土層が、中世の六古窯の一つである信楽焼に利用されてきたのである。

3. 六角氏の隆盛

甲賀郡の中世城館と深い関係にあるのが、近江守護職であった六角承禎と義治父子である。六角氏は近江源氏の佐々木氏から輩出した支流で、佐々木氏の祖は宇多天皇である。この六角氏の動きを応仁の乱より述べる。

応仁元(1467)年に京都をはじめとして勃発し、やがて全国に波及していった応仁の乱では、六角氏は西軍の山名持豊(宗全)に味方した。その頃の六角氏の当主は、亀寿丸であったが、幼少であったために一族の山内政綱が補佐して乱に臨んだ。家臣の子息を殺害したために家督を追われた六角政堯と江北の京極勝秀は東軍の細川勝元に味方し、同年六角氏の本城である蒲生郡安土町の観音寺城を攻めた。応仁二(1468)年六角勢は大敗し観音寺城は落城した。近江を軍事的に掌握した六角政堯を、8代將軍足利義政は近江守護職に任命した。さらに文明元(1469)年幕府は、京極持清を近江守護職に補佐した。

そのような情勢に対し京都で奮戦していた亀寿丸は、即座に京都を引き払い兵を近江へ向けた。翌年京極持清が死去し京極氏が家督争いで混乱状態となり、亀寿丸が近江一国を支配することとなった。その後亀寿丸は行高と改名し東軍や京極政経と戦い続けるなか、文明十年近江守護職に補任された。幕府は近江に寺社本所領の本主への返還を求めてきたが、行高は要求を無視し湖西地域の延暦寺領をも押領した。このような行高の行為に対して幕府は六角氏討伐を決定した。長享元(1487)年9代將軍足利義尚が近江に侵攻した。高頼と改名した行高は、戦いらしい戦いをすることもなく甲賀へ逃れた。その後高頼は伊勢に逃れたが、將軍義尚に対してゲリラ戦で挑み長期戦となった。幕府軍は戦果が上がらず戦意も喪失し、將軍義尚は栗太郡の陣内で死去した。

長享元年から三か年にわたる幕府軍との戦いに持ちこたえられたのは、六角氏と国人の強い関係があったからであると考えられる。守護大名が家臣などにより取って代わられる下剋上の風潮が日本全土を席卷する中で、六角氏は守護大名から戦国大名へと発展し存続していったのであった。

4. 甲賀郡同名中惣

近江には723年の三世一身の法やそれに続く743年の墾田永年私財法により、8世紀には多くの初期荘園が成立していたと考えられる。特に中央官寺である東大寺の荘園開墾は活発で近江国内に11か所の荘園を所有していた。平安時代末期には、荘園領主は不輸・不入の権を得てそれを行使した。比叡山延暦寺が強力な勢力を持ち数多くの荘園を所有し、甲賀郡内には7か所の荘園を所有していた。鎌倉時代には、鎌倉幕府は御家人を全国の荘園に地頭として配置し、年貢の徴収・納入、土地管理等の任務にあたらせた。それにより荘園支配体制はより複雑なものになったのである。権門社寺の支配体制が弱まる中で、武士勢力が荘園の支配権を伸長し経済基盤とした。

荘園では、農業技術も飛躍的に発展し麦を裏作とする二毛作が広まり、牛耕・馬耕や農具も普及していった。それにより生産力も大幅に上昇した結果、小農民が名主に生長した

り名主に隷属していた下人が独立して名主となる事象が現れた。13世紀以降、惣村とよばれる自治的な組織を持つ村が現れた。惣村では村人の集団的意思によって行政、経済、宗教的行事などが運営された。多くの場合惣村の中心には神社があり、村人は宮座を組織して神社の祭祀を執り行い社殿の維持管理にあたった。神社は、宗教的な精

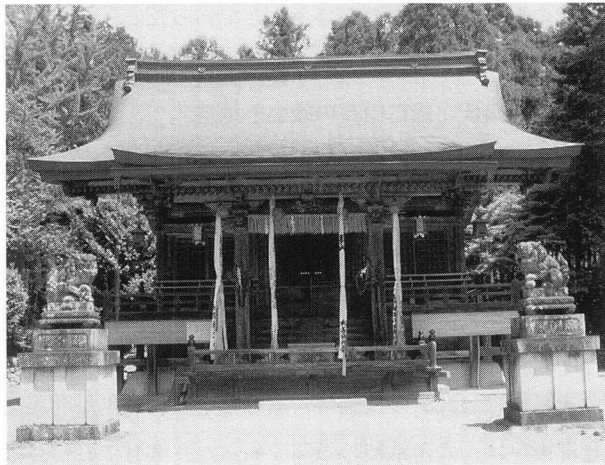


写真1 矢川神社

神的な支えであるとともに、村人が寄合を開き村内自治の中心となる公共施設でもあった。また、犯罪に対しては、犯人を領主に引き渡すことなく村の掟により裁くという自検断の権限も有していた。

甲賀郡では、惣村の形成は遅れ異なった形態で自治組織が発展していく。これは在地の有力国人、地侍が近隣地域内で同姓の庶子家や所従で主家の姓を許されたものや、異姓ではあるが姻戚関係にあるものなど、同姓を名乗る擬制的血縁組織を形成し同名中惣と称した。同名中惣では、寄合によって惣の意思決定を行うが、その中心は惣領にあるのではなく、同名中惣から選ばれた奉行による合議制であった。惣村が農民自らの自治によって運営されていたのに対して、同名中惣は在地領主の連合体として村落支配を行ったのである。

同名中惣を組織した地侍の中でも、長享元(1487)年の將軍足利義尚の侵攻に対し義尚の陣に夜襲をかけた地侍たちを「甲賀五十三家」とよぶ。その中でも特に軍功があり、六角氏より感状を賜った家を「甲賀二十一家」とよんでいる。これらの甲賀の地侍は六角氏と主従関係にあるように考えられるが、実際に主従関係にあったのは三雲氏と儀俄氏のみであった。

甲賀郡中惣はそれぞれの同名中惣から10人程度の奉行を選出し、奉行中惣として運営にあたった。惣の寄合は各地域の持ち回りで、村の中心となる神社で行われたようであり、甲南町の矢川神社でも寄合が開かれていたと考えられる。甲賀郡中惣のような地侍連合では、惣領家の突出した領主権力が現れず多くの在地小領主が散在する状態であった。このような地侍は各自で村の背後の丘陵地に城館を築いたのである。滋賀県内に1300か所の城館跡が確認されているが、その内の400か所が甲賀郡内に集中している。そして、戦国期を通じて巨大な山城は出現せず、すべて一辺50m程度の土塁と堀に囲まれた小規模な方形

館城の形態をとるものがほとんどであった。

5. 六角氏と織田信長の戦いと地侍

ここでは、戦国時代の風雲児である織田信長と六角承禎と義治父子の戦いについて述べる。周知の通り永禄3(1560)年織田信長は、東海一の弓取りといわれた今川義元を桶狭間の戦いで討ち、その後急速に勢力を伸ばした。永禄十(1567)年には居城を尾張小牧城から美濃稲葉山城に移し、稲葉山城を岐阜城と改めた。この時期より「天下布武」の印を使いはじめ天下統一に向け活動を活発化した。

永禄十一(1568)年信長は、室町幕府15代將軍足利義昭を奉じて上洛の行動を起こすが琵琶湖南岸は、六角承禎の領国であった。8月7日信長は將軍義昭の使者に自分の使者を加え信長に味方するように説得したが、承禎は承知しなかった。9月信長は総勢6万の軍勢で岐阜を出陣し、六角氏の箕作城、和田山城、主城の観音寺城の目の前に陣を張った。先ず信長は箕作城を攻めた。六角勢は奮戦したが破れ箕作城は落城し、その夜に観音寺城の六角承禎・義治父子は甲賀郡を目指して逃亡した。その結果、信長は簡単に観音寺城に入った。

元亀元(1570)年4月信長は、朝倉義景を攻略し天筒山城(敦賀市)と金ヶ崎城(敦賀市)を攻め落とし越前敦賀郡全域を占領したときに、義理の弟で同盟者の浅井長政が寝返り朝倉義景に味方したのである。信長はわずかな馬廻だけを従えて若狭街道を南へ走り、朽木元綱の領地を通りなんとか京都にたどり着くことができた。

信長が越前遠征に失敗したとき、甲賀郡に逃亡していた六角氏が浅井長政の離反に呼応して琵琶湖沿岸まで進出してきた。信長はそれに対して兵を送り六角方になった土豪たちを破った。

同年5月勢力を持ち直した六角氏が草津方面に進出してきた。甲賀・伊賀の土豪を中心とする数千の兵力を持っていた。6月野洲川北岸の乙窪(野洲市中主町)で、六角氏の軍勢と柴田勝家、佐久間信盛を大将とする信長軍が戦った。戦いはすぐに決着がつき六角軍は南へ敗走した。

元亀二(1571)年江南の浄土真宗の中心的存在であった金森に、摂津石山本願寺より一向一揆軍の指揮官として川那辺藤左衛門秀政が派遣され、信長方の佐久間信盛との間に戦いの火蓋が切られたのであった。この戦いは一揆勢が人質を出して金森城を開城して終結した。そのために一揆勢の兵力は温存されることとなった。元亀三(1572)年六角承禎・義治父子は一向一揆勢とともに蜂起した。これに対し信盛は、江南一円の坊主、地侍から一揆に加担しないという起請文の提出を求めた。この作戦の結果、蜂起は自然消滅のような状

態で終わったのであった。

6. 杉谷望月城

望月城は丘陵の北端部に築かれている。城の西側には比高差約7mの2本の堀切を造り、東側には副郭を造っている。虎口を東に向けているが、土塁に沿って浅い堀が掘られており、そのために土橋を渡って郭内に入ることになる。土塁の高さは



写真2 杉谷望月城（主郭内部より虎口を望む）

虎口付近で約4mあり、西側の最も高い部分では約7mの高さがある。郭内部は約30m×30mの広さがあり、土塁の外側では約60m×60mの規模である。北側には低い土塁で囲まれた武者隠しと考えられる郭状のものが確認できる。北西部にはこの城に入るための進入路が確認でき、この通路は北側の堀底を通り東側の虎口に回り込んだと考えられる。

また、このコースは敵が迫ってきた時に敵に悟られずに城を脱出する通路として使われたのではないかと考えられる。現時点では望月城の郭内に建物が建てられていたかどうかも含め常時郭内に城の主が居住していたかどうかは不明であるが、戦いの時にはこの望月城の主である地侍はこの城の中で戦いに備えたであろう。しかし、信長の強大な軍勢が迫ってきたときには戦わずに城を抜け出し、あたかも將軍足利義尚に対して甲賀郡の国人が戦ったようにゲリラ戦のような形で戦ったのではないか。その様に考えるならば、城には多くの兵が立て籠もっているように、多数の幟や旗等を立て籠城して戦うように見せかけながら、敵に気付かれることなく城を抜け出したのではないか。その様に抜け出すためにはこの通路はとても都合がよかったと考えられる。この城の東側は、川によって形成された小さな平野が広がっているが西側は丘陵地が続くので、城を抜け出した軍勢は木々の中に隠れ、敵の信長軍の動きを見ながらゲリラ戦の作戦を立てたとも考えられる。

7. まとめ

旧甲賀郡には強大な権力を持った領主が現れなかっただけでなく、国人や地侍が擬制的血縁関係を結び同名中惣を組織した。同名中惣は在地領主の連合体として村落支配を行ったのである。そして在地領主は現在の社会でいう一国一城の主という言葉通り、自分たちの地位や力を誇示するが如く城館を築いたのではないだろうか。そう考えるとこれらの城

館の主たちは、現在の社会にも広く見られる自動車や家屋にお金をかけ、自分の経済力等を誇示しているように見える一部の現代人に通じるところがあるように感じるのは私一人ではないだろう。

また、甲南町の丘陵地が広く分布する地形も城館が多数造られた要因の一つと考えられる。戦うための施設である城館を造るには小高い丘陵地が適しているであろう。武器や物資、食料を運び込むためには少々苦勞するであろうが無理ではない高低差、敵が攻めてきて籠城戦になったときには敵より高い位置にいるために敵兵に大きな石を落として攻撃するなどさまざまな有利な状況を提供してくれるのが丘陵地なのである。従って丘陵地の上部は城館築造に最適な土地であったと考えられる。

最後に、このような中世の人たちが築いた城館の存在を多くの人に知って頂きたい。近年中高年の山歩きやハイキングが盛んであり、甲南町の城館はハイキングに適した高さの丘陵地にある。自分の足で城館に登り郭内部や虎口に立ち周囲の景色を見渡したならば、城の主が信長の軍勢が攻めてきたときの思いや感情が伝わってくるのではないだろうか。

(やぎ・あつゆき＝京都府立桃山養護学校教諭)

参考文献

『甲南町史』1967年

松岡 進『戦国期城館群の景観』(校倉書房)2002

谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書)2002

畑中誠治、井戸尚三、林 博通、中井 均、藤田恒春、池田 宏『滋賀県の歴史』(山川出版社)2001

安部龍太郎『戦国の山城をゆく』(集英社新書)2004